

## 84年～85年 URS、現函館RS指導者の伊能氏のURS創立時の回想記

### 創立記

函館 伊能康弘 (いよく やすひろ)  
(編集/構成 遠藤)

#### No.1

6月頃だった。大雨の朝、同じ団地のコーチ依田さん荒井さんから相次ぎ電話で「きょう、練習やるの」まさか、大学でも社会人でも公式戦以外は休むよ。今監督に電話するわ。すぐ31-3226に。「飯塚です」康弘だけ。「おお、朝から大変だよ。今の親はダメだよな。子供に今日は大雨だから練習休みだと言っているのに、ラグビーは雨が降ってもやるんだ。練習やるんだ。練習行くんだ。と聞かないんです。どうなんですって言う電話ばかりだ。決まってるよな、練習、練習」ハイハイ。このオッサン狂ってる。

旧大原グラウンドには全員集合、大雨の中セービングだー。これがタックルだー。初めは、引いていた子供たちも泥だらけの中いつしか大はしゃぎ。「康弘30分ぐらいな」の言葉に、1時間の泥んこ練習。雨をシャワーに体を洗ったのは、初めての出来事です。

団地に帰り、依田さんの家で荒井さんと3人の反省会。だいぶ飲んで、依田さんが「監督ってすごいよね、子供ってすごいよね、皆馬鹿だよな」泣きながら話してました。涙は、心の汗だ。

U. R. S 初めての雨中練習でした。

#### No.2

昭和58年暮、かとれあ書房に寄ると博明ちゃん(私の生家は、西高道路のかとれあの斜め前にあり、生まれて間もなくから飯塚家に入居してました。彼を飯塚さんと呼んだことはなく、私も康弘以外呼ばれたことがありません)が「ラグビースクールを作ろうと思うんだ」..。

いろいろ話を聞き、子供にラグビーか。イイね、イイね、いい話だねと答えると、「お前も手伝え」(私は2年前足を骨折し1ヶ月入院したけれど、まだまだ現役でプレーしていました)関西風の「考えとく」と答えて店を出、家路までスクールかァ.....。

それまで見たことのない世界、いや大学時代NZ留学の際、休日の午前中子供達が裸足でグラウンドを走っていたこと。月曜日には外に洗濯した子供のジャジーを干すのが親の自慢だって話してたなァと、ふと思い出しました。家に帰り妻 甲(きのえ)に話すと「あら、良い話ね。家のベランダにも干したいわね」と可愛く微笑みました。(今でも可愛いいです色々。)

#### No.3

昭和59年日本選手権は、釜石が同志社に勝ち6連覇となった。ラグビーブームが始まりかけた。

2月ごろ博明ちゃんから再度呼び出し。「春からはじめよう」、断りきれない。スクールと言う名前が良いけれど学校ではなく、クラブにして欲しい。子供に教える先生というより一緒に楽しむコーチにしてほしい。と提案しました。

さて、募集そして用具です。募集は、ロコミ 博明ちゃんの長男・次男の友達を誘おう。そしてポスターを妻に書いてもらいました。(この時の絵が10周年のペナントになっていました)私の住んでいた団地に昔大原中の番長だった、依田さんという方がいて、その人の息子をいれて、依田さんをコーチにしようと思

いました。同じく荒井さんという元サッカーをしていた方がいて、同じく息子を入れ親父をコーチにしようと思い二人を我が家に呼んで、酒を呑み過ぎました。息子たちは、本人たちに聞かず即 OK。親は、グズグズ酔い潰れる一歩手前でやっと了解を得られました。

用具は、ヘッドキャップはお祝いにクラブで出そう。ボールは、皮の妊娠ボールが一つ有り、あとはモルテンゴムのRAゴムボール 2,650 円（当時ギルバートのボールは9000円ぐらいしました）3個買いました。ユニホームは、1年ぐらいしてから。グラウンドは、旧大原グラウンドと決め開催の日を待ちました。

#### No.4

初めての練習は5月の連休後だと記憶しています。子供たちは先ずかとれあ書房に集まり、そこから皆そろって旧大原中のグラウンドに行きました。

メンバーは飯塚博文、高山圭介、飯塚貴夫、粕谷剛士、荒井俊介、依田太一郎、飯塚監督、依田コーチと私、そして味噌っかすの伊能努（2歳4ヶ月）です。その日の写真が、努のアルバムに貼ってあります。皆、新しいヘッドキャップをかぶって、博文は赤のジャージー、他の人はTシャツでした。

開口一番私は子供達に、ラグビーは、走るスポーツだ。と言いました。これは私が高校1年の時の久我山高校との合同合宿の時、久我山高校監督の中村誠先生の口から一番に発せられた言葉だったのです。練習はランパスから始めました。皆楽しそうに練習しました。しかし監督をふと見ると、なんと、まだ2歳の努に、「ラグビーやろうよ」「やだ!」「おもしろいからやろうよ」「やだ!」と、誘ってくれてるではないか・・・しかし、わが息子はずーっとグラウンドに絵を書いていた。

練習は私に任せて、努の面倒を見て頂いた監督には、本当に感謝しています。が、私に全て任せて頂いた為に、取り返しのつかない事になって行きました。

#### No.5

昭和59年当時、練習内容は高校・大学の練習とたいして変わりませんでした。体操・ランパス・ショートダッシュ・スクラム・など。私自身が勉強もせず、ただ今までのラグビー生活を子供達に押し付けていました。

当時、小学生のラグビーは15人制で1988年やっとなんて、日本協会がミニ・ラグビーという言葉を出して来たと思います。しかし、それ以前に（D・H・クレイブン著）「選手とコーチのための現代ラグビーの技術と戦法・1969・」と言う本の中で、なんと小学生に対する指導法が、掲載されていました。かと言って、そんな本が有るのも知らず、勉強する気など更々ありませんでした。全て、経験から指導し、根性だけの「押し付け指導」。声が小さいとビンタ、走るのが遅いとビンタと、まるで私自身のストレスを、子供に向けていただけでした。それでも、毎週子供達は参加してくれていました。多少ですが、人数も増えて来ました。

平成4年8月札幌で、北海道初の関東協会ミニ・ラグビー指導者研修会が、開かれ参加しました。川嶋敦夫氏の話聞いていた時、身体がブルブル震え、そのうち涙が出てきました。

私は今まで、なんてことをしてしまったんだろう。技術講習の時も、パスの取り方・投げ方・グリッドを使用した練習法など、初めて目・耳にする事ばかり。何年も、ラグビーをしてきて、何も知らなかったんだ。目からウロコ、恥ずかしい、穴を掘って入りたい気持ちで、函館に帰って来ました。小さな仲間達本当にゴメンネ、私を許して下さい。

#### No.6

昭和59年8月末、初めての夏合宿を、入間川の相当奥の民宿で行いました。

子供達はいつもの6人です。監督のボンゴタイプの車に監督、依田コーチ、私、そして子供達を押し込

め、夕方出発しました。翌朝、練習をして昼頃から川原で火を起しキャンプのようなことをしました。この時、依田コーチが活躍しました。火のつけ方、飯盒の炊き方など都会育ちの私には真似のできない事でした。カレーライスだったと思います。

監督と依田さんはビールをガンガン飲みペロペロ、帰りの車は私が運転し二人は車の中でマグロ状態。後日二人して「あんたは、マグロだ」いや「アンタがマグロだ！」と罵りあってました。子供達も親元を離れ少し大人になったようでした。

秋になり練習場を西高のグラウンドに移しました。高校生に、コーチしてやると言ってグラウンドを使用したわけです。たしか、この頃から西高の前のお店で、アイス・ジュースを練習後出したように記憶しています。すると、このアイス・ジュースの話が広まり、数人の仲間が入って来ました。

## No.7

秋からテレビドラマ「スクール・ウォーズ」が始まりました。このドラマの滝沢先生のように「私が教えてるんだ、強くなるんだ」と、一人思い違いをしていました。ティーチングもコーチングも、いいか見てろ、こうするんだと言葉を使わず身体で見せ、真似をさせます。子供達ができないと「なぜできない！ちゃんと見ていたのか」と怒鳴り挙句の果てビンタ、一人テンション高く、依田コーチ・荒井コーチは只啞然とし、子供達に「頑張れ、良くできたぞ」と励ましてくれていました。監督はそんな私を怒りもせず、じっと我慢していてくれました。

昭和60年釜石7連覇の年です。ユニホームを作ろうと話が出ました。ブルーに左袖白2本線、パンツも白、ソックスもブルーに白2本線。妻が白のフェルトでUのマークを何枚も作り、皆の胸に貼りました。立派なラグーマンの誕生です。

どこかとゲームをしようと話が出始めたのもこの頃です。

## No.8

まだ寒い3月の曇りの日曜日、貸しきりバスの中は遠足気分の子供達とその父兄達。むかうは前橋です。

これから初めての練習ゲームが始まろうとしています。グラウンドに着くとそこに元日本の斎藤功氏が立っていました。元日本選手に指導されている子供達はどんなに強いんだろうかと内心ビクビクしていました。

さっそく斎藤さんのそばに行き、学生時代に三洋電機へ練習に行きお世話になった御礼などを話すと、笑いながら「私はその兄弟です」との答えにホット胸を撫で下ろしたのを覚えています。

そういえば函館のスクールに初めて行った時、元日本の井沢義明氏のそっくりさんがいて、話しかけると本物だったのですごくびっくりしたのも覚えています。その後、井沢さんの母校早大が(大学選手権で)私の母校に負けた時(2~3回)は2ヶ月位話をしてくれなくなるのですが、普段はとても良いおじさんです。

その日のゲームは惨敗です。ボールを持っても前へ進まず後ろへ走る子、相手から逃げる子、一人二人を除いてタックルもできない状態でした。私はタッチライン際をウロウロして大声で子供達に、なにやってるんだ、そうじゃないだろう、このばか！！と罵声をあびせていました。あんなに一生懸命一年間教えたのに！・・・

函大有斗高校の安本文康監督にある日、こんな事を言われました。

「ゲームは、学校で言うテストだ。教えてもない事を答えろ、と言っても生徒は答えられないぞ。生徒が理解できるようになって初めて、教えたといえるんだ。要するに、先生へのテストでも有る。何やってるんだと言われるのは、誰だ？」

前橋からは酒屋で目一杯酒を買い、べろべろで浦和に帰ってきました。

## No.9

春から、数人の子供達と二人のコーチが入ってきた。井出隆（電通大出）田嶋誠（浦和西出 浪人）5～6年生の女子が入部を希望して来たが、お断わりしたらしい。

ある日、4～5年生に教えていた田嶋コーチが飛んできた。「伊能さん、頭来ますよ」S君が何回教えても出来ないで「いいかげん出来るようになれよ」と言うと、「こんな事出来なくて良いもん、ぼく勉強できるから」、浪人一年目の田嶋コーチは完全切れていた。

よし、シメに行こう。大人二人して言葉だけではなく手での暴力をふるった。「大人を、舐めるなよ！」

しかしS君はその後何回も田嶋コーチと喧嘩していた。理由はいつも「ぼく、勉強できるから...」

あいつらその後どうしたろう？井出コーチも熱血で、二人で騒いでいたがしばらくして海外に転勤して行った。

夏合宿は前年と同じく人間の奥、数人の父兄が参加した。秋になり、二度目の練習試合が、ふくじゅ草ラグビースクールと対戦する事になった。

## No.10

ふくじゅ草との対戦前日、土曜日。会社から帰ると妻と子供が家にいない。テーブルの上に「実家に帰ります」との手紙が有りました。

妻が内職までしてるのに、まじめに仕事もせず、三歳一歳の子供がいるのに、人の子供のばかり面倒を見る。酒を浴びるように飲む。そんな私に嫌気をさし函館の実家に帰ってしまいました。（今でも仕事以外大して変わらない）

それから函館に住所を移すまでの3～4ヶ月間、スクールの記憶がまったく有りません。グラウンドにいつて何をしていたかも思い出せません。

只、ここに一個の白いサインボールが有ります。伊能コーチへ U.R.S. 1986. 3. 2 飯塚博文・高山圭介・飯塚貴夫・粕谷剛士・依田太一郎・荒井俊介・田島恵介・宗形正之・正野勝之・石谷育弘・水川卓磨・野中直樹・市場元樹・かすやひろし・福崎武・福崎洋・北村泰雄・村田真吾・池原亨・鈴木乾也・いしだともひろ・正野晃由・吉田倫己・河崎真一・堀越哲郎・宮本竜太・曾木伸昭。

あれから16年、彼らも子供を持つ親になっている年頃です。何人の子が、ラグビースクールで学んだ答えを出しているのでしょうか。

思いやり・礼儀・勇気を教えようと始めたスクールの指導でしたが、子供の心もわからず、いつか自分の名声を高めようと思いを違えていた私。創立から二年、取り返しのつかないことをしてしまった。（終）

## あとがき

1ヶ月前パソコンを入手。URSのホームページの中「みんなの掲示板」過去ログを見ているうちに、むしように昔の事を思い出した。あんな事、こんな事、有ったよな。掲示されている文章を見ると、現在函館で起きている問題・事件・子供達とたいして変わらない。ただ研究心と情熱はだいぶ浦和の方が熱い。昭和61年、私が函館に来た時のスクール生徒数は270人。今では半分以下になっている。それに比べ浦和は当時の三倍以上。どんなにか指導者の苦労があったか想像するに余りある。随分前、博明ちゃんに「C級指導員、C級レフリーは最低でも取れよ」の言葉に、もうC級レフリーを取得していた私は一念発起、B級に挑戦し合格。ことし道協会でも十数年振りにC級指導員の講習会が行われるので、これもチャレンジしようと申し込みをした。

私の仕事は、クリーニング屋です。毎日機械と向き合い、いつでも良い仕事出来るよう整備し、掃除を繰り返す。資格もそのように思えてならない。